

## 2026年4月26日 召天者記念礼拝

聖書: コリント人への手紙第一15章50～58節

説教: 死なないものを着る

はじめに

中本亀子姉は、この教会が建てられて最初の召天者となりました。姉のことで思い出すのは、いつもだれか悲しんでいたり力をなくしているような人がいるとそばによって手を取り、「大丈夫。一緒に天国に行きましょう」と励ましておられた姿です。中本姉は、日本の敗戦とともに満州から引き上げてくる途中、雅文ちゃんを亡くされたと伺いました。その苦労をされながら日本に戻ると、二人のお嬢さんを近所の教会学校に通わせたことがきっかけで、ご自分が洗礼を受けられたそうです。それ以来、天国という希望を信じて最期まで揺るぐことはありませんでした。この信仰の先輩である中本姉が、この教会の先頭に立って私たちを応援してくれている。私にはそんなふうに思えるのです。

人生は苦しみに満ちています。一生懸命がんばっても、最期は死ぬだけです。それなのになぜ私たちは希望を持つことができるのか。聖書から聞きたいと思います。

### 1 もしよみがえりがなければ

#### 1) 信仰はむなしなものとなる

この手紙を書いたパウロは別の箇所で「キリストがよみがえらなかつたら、私たちの信仰はむなしなものとなる」と述べています。キリスト教の核心部分は何なのでしょうかと問われたとき、挙げるべきことはいくつかあるのですが、キリストが死者の中からよみがえられたことは絶対にはずすことができません。もしそこをはずしてしまえば、中身がないむなしな信仰になってしまう、それほど大切な教えです。

#### 2) 労苦が無駄になる

いま「信仰がむなしなものとなる」といいました。実は、これと同じことばが58節のところにも使われています。「自分たちの労苦が主にあつて無駄でないことを知っている」の、「無駄」がそれです。

だれもが幸せになりたいと願って一生懸命がんばります。それで運良く人もうらやむようなたくさんの財産と名声を手に入れたとしましょう。しかしどうでしょうか。結局死んだらおしまいです。よく言いますが、棺桶に入れてあの世に持って行けませ

ん。そのことに多くの人は薄々気がついています。でもどうしようもないので、考えないようにして問題を先延ばししている。それが現実です。いったいどうしたらよいのでしょうか。

### 3) 解決は？

この問題を解決する方法は二つ考えられます。一つは、人が死ななくなること。古来、不老不死の妙薬を求めるといふ話がたくさんありますが、いまだに発見されていませんので、これは無理です。二つ目の解決。たとえ死んでもよみがえるならば問題は解決できる。こう言うともな笑うでしょう。漫画や映画ならいざ知らず、実際の人間がよみがえるなどありえない。しかし聖書は、おおまじめに人が死からよみがえることを主張し、これこそがキリスト教の核心部分だとさえ言います。そこで今日は、二つのことをとり挙げます。一つ目は、死からのよみがえりはどのようにして起こるのか。二つ目は、死からのよみがえりを、どのようにしていただくのか、この二つです。

### 2 ラッパが鳴るとき

#### 1) 変えられる

まず一つ目。死からのよみがえりはどのようにして起こるか。52, 53節。「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。」

終わりのラッパが、いつ、どのように鳴るのかは、聖書には詳しいことは書かれていません。いづれにしてもここでわかるのは、私たちの生きているこの世界は永遠に続くのではない、限りがある。最後の日にラッパと呼ばれるものが鳴り響いて、一瞬のうちにやってくるらしい。そのとき何が起きるか。「たちまち、一瞬のうちに変えられます」とあります。どんなふうに変えられるかというところ、このあと「死なないものを着る」と続く。でもどうでしょうか。生き死にのことがまるで服を着替えるようなこととして言われると、なんとなく腑に落ちないのではないのでしょうか。

## 2) 自分とからだ

パウロが少しきどって文学的な表現をした、のではありません。おそらくパウロの実感としてこういう感覚があったのでしょうか。

皆さんは、自分の子どものときのことを覚えているでしょうか。私は、一歳から二歳くらいのときのことを断片的に覚えています。一つは、えじこと呼ばれるわらで編んだ籠に入れられて家の中にひとりぼっちにされたときのことです。お尻にあてていたおしめが最初生ぬるくなり、そのうちだんだん冷たくなっていったのを覚えています。二つ目に覚えているのは、よちよち歩きを始めたときで、からだのバランスをとるのに苦勞している光景です。そのときの感覚をことばで表すと、まさに服ということばがぴったりののです。自分のからだなのに、からだを使いこなせなくて、まるでどこからか借りてきた重たい服をいきなり着せられて戸惑っている。そういう身体感覚がありました。ですからここで、からだのことをまるで服を取り替えるような言い方をしているのを読むと、パウロが信仰のことを知識としてではなく、身体感覚としてもとらえることのできた人なのだと改めて思われるのです。

## 3 キリスト

### (1) 朽ちるべきからだとなった理由

さて、終わりのラッパが鳴る日、私たちは死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになる、死んだ者がよみがえり、永遠のいのちをいただくということが起こることはわかりました。では、どのようにしたら死なないものを着ることができるのでしょうか。

このことを二つ目に考えたいのですが、そのためにはそもそも私たちはなぜ死ぬ運命の下に置かれているのか。そこから始める必要があります。専門の学者に尋ねれば細胞や遺伝子の話しを持ちだして説明はしてくれるでしょう。でもどうでしょうか。たとえば愛する家族を病氣や事故で亡くしたとき、医師は専門的な説明をするでしょう。でも知りたいのは、なぜ私の家族が死ななければならなかったのか、もっと靈的な深い説明です。しかしだれも説明してくれない。いや、世の人たちはできないのです。

しかし聖書は、この問題についてまっすぐに語ります。そもそも人は神によって造られた最初の時、死ぬことはありませんでした。ところが最初の人、アダムとエバが神に逆らい罪を犯したことによって、人は死ぬものとなりました。聖書はこれを

「罪の奴隷」と言っています。この罪を解決しない限り、人は死から逃れられません。人類はアダムから始まって今に至るまで、この血肉（けつにく）のからだ、すなわち朽ちるべきからだを着るしかない。それが今の私たちです。

### (2) 十字架の死とよみがえり

いったいどのようにして解決するのでしょうか。そのことが57節にあります。「しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」

私たちは、罪に対して勝つことは絶対にできません。しかし、イエス・キリストが私たちのために三つのことをしてくださいました。一つ目は、この方が私たちの罪を背負われ、十字架でさばきを受けられ死んでくださったこと。二つ目は、三日目に死からよみがえり、死に打ち勝ってくださったこと。三つ目は、このようにしてくださったイエス・キリストを救い主と信じる者に、分け隔てなく永遠のいのちを与えてくださること。こうしてイエス・キリストが、死を無力なものとし、私たちに勝利を与えてくださいました。

### (3) 朽ちないものを着る

パウロは、かつてパリサイ派の若きリーダーとしてキリスト教徒を激しく迫害する側に立っていました。しかしダマスコ向かう旅の途上、よみがえられたイエスに「サウロ、サウロ」と名前を呼ばれたことがきっかけで人生を百八十度変方向転換させられ、よみがえりの主を宣べ伝える者に変えられた人です。彼にとって、死んだ者がよみがえる、朽ちるべき者が朽ちない者を着るということは、頭の知識ではない。まさに自分が体験した事実そのものだったのです。

イエス・キリストは、私たちを十字架のもとに招き、この方が与える永遠のいのちを信じて、新しい朽ちないものを着なさいと語ります。私たちの信仰の大先輩たちは、このことを生涯堅く信じて天の御国に迎えられていきました。

私たちが歩む人生は、苦勞ばかりが多くて、結局死んだら終わりということなら、生きる意味はほとんどありません。しかし、自分たち苦勞は主にあつて無駄にはならない。これは大きな慰めです。この聖書のみことばを信じ、私たちも、主から目を離すことなく歩んでまいりたいと願います。